

ニホンミツバチ分蜂群誘導器

吉田 忠晴, 青木 圭三

4月末から5月になり働き蜂が急増してくると雄蜂巣房や王台が造られ、やがて分蜂がみられる。分蜂の多くは、樹皮の表面があらいうめ、モモ、カキなどのやや湾曲した太い枝部分の樹皮の下に付着したようになる(図1)。ニホンミツバチはセイヨウミツバチのような細い枝にぶら下がるような分蜂はみられない。

ニホンミツバチの分蜂群は、毎年同じ樹種の同じ場所か、もしくはきわめて近い場所に集結することは珍しくない。私たちの蜂場では、毎年4月下旬から6月上旬にかけて分蜂がみられ、蜂場近くのクヌギの幹に分蜂群が集結する。2002年は、4月16日に最初の分蜂がおこり、例年と同じクヌギの場所に蜂球ができた。その後4群が同じ場所に分蜂している。同一場所に分蜂する現象については、幹に蜂の匂いが残っているため誘引されるなどの説があるが、明確な結論は得られていない。

蜂球を作って静止状態になった分蜂群では、蜂球上で新しい営巣場所の探索から帰った働き蜂が盛んにダンスを踊るのがみられる。やがて30分から2時間の間に、蜂球の蜂が舞い上がり、再び空中に乱舞し始めると一瞬の間に新し



図1 太い枝部分の集結した分蜂群



図2 ドーム型(左)と浮利用型(右)

い営巣場所に飛び去ってしまう。そのため大切な蜂群を確保するために、空の巣箱を周辺に置いて分蜂群の飛来を待つ「待ち箱」や、毎年同じ木に集る習性を利用して分蜂群を捕獲する分蜂群誘導器が伝統的に用いられている。

分蜂群誘導器は、ニホンミツバチ養蜂の盛んな和歌山県南部では「ツリカワ」、「ミツウケ」、東京都町田市で結成された日本蜂研究会では「ワバチウケ」と呼ばれている。

「ツリカワ」は和歌山県南部の古座川町で明治時代から使われていた民具で、名前の由来は「吊り皮」から来ている(井上・井上, 1995)。地域によって呼び名は異なり、十津川村や熊野川町では「ミツウケ」と呼ばれている(宅野, 1997)。材質はサクラやスギの樹皮で作られている。40cm×60cmほどの大きさに剥離した樹皮を内(下)側にして、ヒモを中央を通して吊り下げ、乾燥させる。自然にドーム状の形になるとツリカワの完成である(井上・井上, 1995)。ツリカワは「ゴーラ」と呼ばれる丸太巣箱から4~10mほどの離れた3~4mの高さに、角度45°の斜めの状態にして分蜂の時期だけ吊される。巣箱からの距離、ツリカワの角度、分蜂群が飛ぶコースなどはこつが必要で、周辺に3箇所ほど吊しておくようである。ツリカワやミツウケを竹竿に付けて分蜂を待つ方法もある。和歌山県の串本町では、ドーム型のツリカワの左右にサクラの皮を張り付けた板を取りつけた誘導器(図2)や、漁網用の浮の下方部分を切断して、内面に木の皮を付け、誘導器として利用している場所もある(図2)。これらは、5~6mの樹上に滑車を付けたロープで吊され、



図3 対馬の蜂洞近くに吊り下げた誘導器
手元まで降ろす方法を用いている。

和歌山県南部と同様に、長崎県対馬でも分蜂群を誘導するための道具が古くから利用されている。対馬の伝統的な巣箱は「ハチドウ」、「ハットウ」、「ドウ」と呼ばれる蜂洞である(吉田, 2000)。

対馬では分蜂群誘導器には、特別な呼び名は付いていないが、蜂洞の近くに吊り下げている(図3)。スギの樹皮を笠状の板に張り付けたものや(図4)、円筒状に巻き付けたものが使われている(図5)。対馬では分蜂群を誘導する道具のほかに、木に集まった分蜂群を採集する「ハチトリテボ」、また単に「テボ」と呼ばれる専用の道具が使われている(宅野, 1994, 吉田, 2001)。テボは竹籠製で、入口には黒い布が縫いつけられている(図6)。分蜂群を素手か、シャモジなどを使ってテボの中に入れた後に、布を降ろして裾を絞り結ぶ(図6)。テボの大きさには大小があり、分蜂群の大きさに応じて使い分けされる。蜂の入ったテボは、木陰になる枝にぶら下げておき、夕方に空の蜂洞に入れ込み蜂群を確保する。



図5 円筒状に巻きつけた誘導器



図4 スギの樹皮を張りつけた対馬の誘導器

日本だけでなくトウヨウミツバチが生息している台湾でも分蜂収容器をみる事ができる。台湾、基隆市郊外の養蜂場では、竹で編んだ帽子が利用され、蜂球を誘導器に入れ込むための小さな箒も使われている(図7; 吉田, 1995)。

「ワバチウケ」という名称で、日本蜂研究会の会員間で製作されている分蜂誘導器について紹介したい。

1. ワバチウケの寸法

形は3種類でカマボコ型、円筒型、屋根型がある。カマボコ型は、直径35cm~40cm、長さ40cm~45cmの円筒を半割にした形状である。樹皮の表面を内側に曲げて乾燥させ、カマボコ状に仕上げる。円筒型は、樹皮の直径が35cm~40cm、高さが25cm~30cmになるようにし、上部は板で覆い内側と天井部分に隙間のないように樹皮を張り付ける。屋根型は、幅35cm×40cmの平板2枚を切妻型に釘で打ち付け、樹皮を下側に貼りつける。棟の部分に直径5cm~10cmの枝を取りつける場合もある。こ



図6 対馬のハチトリテボ

れらワバチウケの外側には、炭の粉を塗ったり、バーナーで焼くなどして黒い色彩に仕上げると分蜂群が集しやすい。

2. 材質 ワバチウケの内側に使う樹皮は、黒味を帯びた、表面が荒いものを選ぶ。比較的に入手しやすく、加工が容易なサクラの樹皮が適している。直径 25cm～30cm の幹に切り込みを入れ、一枚の皮に成るように剥がす。サクラの皮は乾燥する前は柔らかく、加工が容易でどんな形状にも仕上げるができる。

サクラは公園や街路樹に植栽されており、そこを管理している市役所などの部署へ相談すると入手できることがある。道路の拡張で切られる木や台風などによる倒木があった場合は、早めに相談しておくが良い。

3. 製作方法 直径 25cm～30cm の幹を選んで、長さ 50cm に切断する。幹の中心にあわせて樹皮に一直線の切り込みを入れる。切り込みの端からバールを使ってゆっくりと剥がして一枚皮にする。カマボコ型や円筒型に仕上げる場合は、樹皮を裏返して直径 35cm～40cm の木に巻き付けて乾燥させる。乾燥した樹皮は、時間と共に変形してしまうため、形が出来上がったところで太い針金で形を整える。

屋根型にするには、樹皮を平らな場所に置き、石などの重しを乗せて乾燥させる。樹皮が板状に成りにくい場合には、ハンマーでたたいて、繊維をほぐして乾燥させる。1 か月ほどで樹皮は板状に乾燥するが、白い切り口面は、墨汁で黒く塗しておく。

4. 設置場所 ワバチウケの設置は、ニホンミツバチの巣箱がある位置から 10～15m 離れ



図 7 台湾で利用されている誘導器



図 8 ワバチウケに集結した分蜂群

た、高さ 3～4m の場所を選ぶ。分蜂群が舞い上がり、飛び交いやすいような開けた空間に面した軒下や、樹木の湾曲した太い枝部分に 45° 程度の角度で斜めに吊り下げる。母女王である旧女王が巣を出る第 1 分蜂は、比較的低い場所に集結する。蜂群の蜂量が多いと、新女王が分蜂する第 2 分蜂、さらに第 3 分蜂がみられるが、これらは高い場所に蜂球を造る。そのため、巣箱周辺に 3 箇所ほどに設置するのが望ましい。分蜂時期が過ぎたら、吊り下げていたワバチウケは取り外し、変形しないように、吊り下げた状態で保管する。

5. 分蜂群の収容 ワバチウケに分蜂群を誘導できた場合は(図 8)、地上に降ろして、巣箱の上に乗せ、一気に内部に払い落とす。特に高い所に吊り下げる場合は、予め滑車付きのロープにワバチウケを取り付け、誘導できた蜂球をゆっくりと降ろす方法を考えるのも楽しいものである。

(吉田：〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1 玉川大学ミツバチ科学研究施設；青木：〒194-0211 町田市相原町 1215-2 日本蜂研究会)

引用文献

- 井上直人, 井上梓. 1995. ミツバチ科学 16(4):153-162.
- 宅野幸徳. 1994. ミツバチ科学 15(2):59-68.
- 宅野幸徳. 1997. ミツバチ科学 18(2):55-64.
- 吉田忠晴. 1995. ミツバチ科学 16(2):132-134.
- 吉田忠晴. 2000. ニホンミツバチの飼育法と生態. 玉川大学出版部. 135pp.
- 吉田忠晴. 2001. 対馬の養蜂. ニホンミツバチの文化誌. 自然と文化 67. (財) 日本ナショナルトラスト. pp. 40-43.